

令和2年度

第3回益田市総合教育会議会議録

日 時 令和2年8月24日（月）15：00～

場 所 益田市立市民学習センター 202号室

益田市教育委員会

第3回 益田市総合教育会議

開催年月日 令和2年8月24日（月）15時30分～

開催場所 益田市役所 大会議室

日 程

1 市長あいさつ

2 議事録署名

3 議 事

（1）益田市における中等教育について

（2）その他

出席者

総合教育会議

益 田 市 長
教 育 長
教 育 委 員
教 育 委 員
教 育 委 員
教 育 委 員

山 本 浩 章
柳 井 秀 雄
中 野 純
舟 橋 道 恵
村 上 三恵子
梅 津 富美子

事務局職員

教 育 部 長
ひとづくり推進監
教 育 総 務 課 長
学 校 教 育 課 長
学 校 教 育 課 参 事
文 化 財 課 長
社 会 教 育 課 参 事
人権・同和教育推進室長
美 都 分 室 長
匹 見 分 室 長
教 育 総 務 課 長 補 佐
教 育 総 務 課 主 任

野 村 美夜子
大 畑 伸 幸
長 嶺 勝 良
田 原 啓 文
森 脇 達 也
山 本 浩 之
岡 崎 賢 一
石 田 公
中 島 純 子
齋 藤 一 臣
齋 藤 勝 義
中 田 香 織

長嶺課長 ただいまから令和２年度第３回益田市総合教育会議を開催させていただきます。

 本日の会議は、公開が原則となります。マスコミを初め傍聴希望がありますがよろしいでしょうか。

＝全員了承＝

長嶺課長 それでは、総合教育会議の開会に当たりまして、山本市長から挨拶をさせていただきます。

１ あいさつ

山本市長 皆さんこんにちは。

 今日は、令和２年度に入りまして第３回の総合教育会議ということになります。教育委員の皆様方には、益田市の教育行政の推進に当たりまして格別なるご理解、ご協力、そしてご尽力を賜っておりますことを改めてお礼を申し上げます。

 また、私としましては、今月２日から３期目の任期に入らせていただいております。引き続き、この総合教育会議でもお世話になりますし、市政においてもさまざまな面でお世話になります。どうぞ改めましてよろしく願いいたします。

 さて、今年度は３回の総合教育会議を開催いたしましたけども、５月１４日には、新型コロナウイルス感染症を受けまして小中学校が閉校になっていたところ、その学校再開についての判断のための会議をさせていただきました。また、６月１４日には、同じく新型コロナウイルスの感染症の今後の展開に備えまして、タブレットを活用した新しい教育のあり方について、ご意見を伺って方向性を出したところであります。また、いよいよ明日から小中学校におきましては２学期が始まります。この新型コロナウイルスが蔓延し始めたころには、気温が上がってくれば、あるいは湿度が上がってくれば、夏になれば終息するのではないかという見方もありましたが、全くそうではなくて、この猛暑の中でも、特に都会地の人には新規の感染者が増え続けております。そういった中で、学校においても引き続いて気を緩めることなく活動に入っていきたいと考えております。

 さて、本日の第３回の総合教育会議におきましては、益田市における中等教育の考え方について意見交換をさせていただきます。後ほど、私からも詳細に思いを申し述べさせていただきますが、今回の３期目を迎えるに当たっての選挙におきましても、政策ビジョンの一つとしまして、

中高一貫教育の実現というものを掲げたところでございます。益田市においては全く新しい方向であり、また新しい考え方に基づくものでありますので、この総合教育会議の場におきまして教育委員の皆様方と意見を一致させて、方向を統一して進めなければならないものと考えております。今日は、是非忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます。

それでは、簡単でございますが、第3回の総合教育会議の開会に当たりましてのご挨拶といたします。どうぞよろしくお願いいたします。

長嶺課長 ありがとうございます。

それでは、本日は教育部長が議事を進行させていただきます。よろしくをお願いします。

2 議事録署名

野村部長 初めに、議事録署名者の指名をさせていただきます。本日は、中野委員さん、村上委員さんをお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

3 議事

(1) 益田市における中等教育について

野村部長 本日は、益田市の中等教育のあり方につきまして、市長と教育委員の皆様でさまざまな意見交換をしていただこうと思っております。前段としまして、益田市の教育大綱を踏まえた教育施策に対します現状認識について意見をいただきたいと思っております。

お手元の資料につきまして、担当から説明をいたします。

森脇参事 お手元のA3判の資料をご覧ください。益田市教育委員会では、益田市教育に関する大綱及び益田市ひとつづくり協働構想をもとにしながら、数々の施策の展開を図ってまいりました。これらの施策は、少しずつですが着実に進めてきたもので、現在も継続的に取り組んでいるものがほとんどとなっております。特に、令和2年度におきましては、新しく一人一人の伸びに着目するような埼玉県式学力調査や、4つの高等学校と連携し、共同して授業を進める未来の担い手コンソーシアムの設立、そして中間支援組織との連携、GIGAスクール構想を活用した新たな学びのカたちなどにつきまして、着手しているところです。

この後、意見交換をお願いしたいところは、事務局として「現状」の成果を3つ、課題を3つ、まとめておりますが、成果としてもっとこのようなことがあるのではなかろうか、あるいは課題としてこんなことが

あるのではなかろうか、こんな子どもたちの姿を期待したい、こんな地域になってほしいというようなご意見等をいただきたいと思います。ご意見をいただきながら、現状のところをしっかりとまとめて、成果と課題を整理していきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

野村部長 今ご説明させていただきました内容は、特に教育施策に対する現状認識でございます。

各委員の皆さんからの、この現状認識におけるご意見、ご質問等をいただきたいと思います。

柳井教育長 現状の中にマイナスの観点があります、学びに向かう意欲がないというところですが、全ての児童生徒に対してなのか、限られた中なのかというところが、委員の皆様にも知っていただく必要があるのではないかと思います。

森脇参事 私のほうでまとめさせていただいたのは、学力のさまざまな調査の結果、意欲が十分でないという表現をさせていただきました。家庭学習におきましては、特に顕著な例ではなかろうかと思っております。家庭学習の時間が多ければ多いほど良いということとは言えないかもしれませんが、少なくとも家庭で有意義な生活を行うという意識、学びに向かう意識の部分が、まだ形成し切れてないのではないかと思います、学びに向かう意欲というところを課題として取り上げる必要があると考えております。皆様方のご意見いかがでしょうか。

柳井教育長 小学生、中学生の両方に共通していることでしょうか。

森脇参事 いろいろな調査を分析させていただきますと、小学校はほぼ県レベルということがデータの上では上がっております。中学校につきましては、県よりもおよそ10ポイント以上差があるということで、特に中学校の学びをどう支えていくかということは大きな要点になると分析しております。

舟橋委員 この現状について、教育長の言われるとおり、意欲が十分でないと言われると全員がそうであると感じるかもしれません。表現というのは、より正しく伝わるよう工夫していくことが大事だと思います。

現状としては、確かに課題が多いと思いますので、中高一貫教育で、解決していけるのかというところをしっかりと精査していかないといけないだろうと思っております。

村上委員 学びに関してですが、学力調査の結果などを見ても非常にばらつきがある、二極化していると感じました。ですから、しっかり学びに向かっている子と、なかなか十分でない子との差が随分あるということと、家庭学習においても中学校での生活が小学校とはギャップがある、そういったものを感じております。そういった中で、子どもたちの生活自体の

多様性なども感じており、意欲が十分ではないという言葉では言い切れない、その後ろにあるさまざまな家庭の状況、子どもたちの状況、生活の状況があるのではないかと感じています。

中野委員

益田市で進めているライフキャリア教育について、長年やってきている中で、その成果というのは十分に出ているのが現状だと思っております。なぜ子どもたちが学ぶのかということを学ぶいい場にもなっておりますし、早い段階で将来設計をしやすい、そんな教育環境が益田市にはできているのではないかと認識しております。

反面、心配なところが、学習意欲のことが言われておりますが、その背景というのは、現状、誘惑をするものが出てきており、メディアコントロールが十分にできていないがために、そういった実態が出ているのも間違いないことだと思います。これは学校だけの問題ではなくて、家庭教育というのが非常に重要になってきておりますので、そのメディアコントロールを初めとする自己統制が弱いというところを今後強化していき、学習意欲に向くようなことを示していかないといけないのではないかと思います。

この教育の部分についてはある程度形としてはできていると思いますが、最終的に、言い方が悪いのかもしれませんが、この教育を通じた落としどころ、子どもたちが大人になったときにどういうことにつながっていくのかということが重要だと思います。例えば、全国的に見ても人口減少という課題がありますが、益田地域において、その人口減少の波を緩やかにするとかなど。今日、ネットのニュースで、ダイヤモンド・セレクト編集部が、日本全国SDGs調査ランキングというのを発表しておりました。その中で、島根県においては、昨年37位から23位ということで向上しております。教育県である秋田県、47位から47位。なぜ教育に力を入れているのに、その調査ランキングが最下位なのかというところが非常に気になるところです。これはどういったことかということ、幸福度であったり、満足度であったり、愛着度だったり、定住意欲度だそうです。そういったところを考えながら進めていく必要があると思います。

梅津委員

学びに向かう意欲が十分でないというのも、家庭学習の時間が少ないということもありましたが、先ほど村上委員さんがおっしゃったように、家庭環境という背景もあったり、いろいろあると思います。けれども、埼玉県式学力調査の「ひとりひとりの伸びというものさし」へ転換していくということで、すぐに結果は出ないと思いますが、良い方向に向かうのではないかと、意欲を持って学習に向かえるのではないかと思います。

野村部長

ありがとうございます。

メディアコントロールという言葉も出てきましたが、このことについてご意見がありましたらお願いしたいと思います。

また、現状として良いところ、課題があるところが3つずつ上がっておりますが、これ以外でもお気づきの点等がありましたら、ご意見をいただきたいと思います。

柳井教育長 メディアコントロールにつきましては、先ほど中野委員さんからありましたように、益田市として最重要課題として捉えております。先ほど、森脇参事からもありましたように、子どもたちの家庭学習時間が少ない。そのことは、メディアもかなり影響しているのではないかということが学力調査からも出てきております。そういったことに対して、何も手を打たなければ、ますます子どもたちは楽な方へ行き、メディア漬けになってしまう。それを一つでも防ぐために、家庭としっかり連携をとりながら、子どもたちが自分をコントロールできる力、そういったことを身に付けさせるのが学校の役割ではないかと思います。一方では、家庭における家庭教育のあり方で、子どもたちをどう育てていくかという、そういう両局面があると思っております。

そういったことで、昨年度からPTA総会が一番保護者が集まりやすい場所ですので、そこに教育委員会から指導主事が出向いて、メディアについてのコントロールのお願いをしていくという取組を行っております。今年度は、コロナ禍の中で、それができなくなっておりますが、何らかの形で手を打っていかねばいけないと考えております。

梅津委員 自己統制力が弱いというのもあると思いますが、食事中、子どもではなく親のほうがスマホを離さないという家庭も多いらしいので、まずは家庭環境を整えていくというのが大切だと思います。

村上委員 さまざまな家庭環境の中で、益田市の子どもたちの育ちがあるというところは押さえておかないといけないと思います。みんなが同じような家庭の中で、経済力も、それから環境も、世帯の構成も、そういう中で子どもたちの育ちがあるのではなくて、本当にさまざまな家庭の中で子どもたちが育っているということを背景として持っていかなければいけないと思います。そうしてみると、子どもたちのさまざまなマイナスの面も見えますが、反面、地域でいろいろな活動をしている子どもたちも増えてきていまして、地域の活動に参加している中での中学生は、本当に生き生きとして、大人たちに積極的に話しかけてくれたり、益田に住んで良かったということや、この町にこれからも住んでいくということを言ってくれる中学生もおられ、益田市の中学生たちを見ていると、私たちも希望が湧いてくるように感じます。

野村部長 ありがとうございます。

学びに向かう意欲のところは、その背景を十分に思慮した上でとい

うところが大切であるというご意見でした。また、もう一点は、社会に向かう意欲が伸びてきているというところを実感しているというお話しでした。

中野委員 A3判の資料の中で、GIGAスクール構想を活用した新たな学びの形の中で、これが抜けているのかなと思った部分が、ICTとかIoTのことが示されていないくて、今後、益田市が進めていく、タブレットの話もありますので、ICTをどういう形で利活用していくのかというのをこの中に示しておかれたほうが良いのではないかと感じました。

野村部長 GIGAスクール構想のタブレット配置ということだけではなく、広い意味でICTを活用した学校教育、社会教育というところを捉えたほうが、それが必要であるということですか。

中野委員 益田市には電子黒板等が各学校に配置されていますので、県内でも早い形でのICT機器の設備がされています。ただ、そういった情報がしっかり伝えられていないという実情もありますし、保護者の人たちは授業参観等があれば見る機会もあるかもしれませんが、一般の方々に十分に知られていない実情があります。そのあたりを明確に形として示されて進めていくというのが重要ではないかと感じます。

野村部長 ありがとうございます。

ここまでやってきたこととして、アナウンスすべきところはしっかりとアナウンスしていくべきだというご意見でした。

意見が尽きないところではございますが、現状として上がってきているものに対しては、ご賛同いただけたのではないかと思います。

これらを踏まえまして、市長から、益田市型の中高一貫教育に関する考えについてお話をいただきたいと思います。

山本市長 今、益田市の教育についての全体的な認識について皆様からお話をいただきましたが、実際ライフキャリア教育というのを益田市で打ち出してから、子どもたちが地域に触れる機会というのは、確実に増えてきている、これは確かだと思います。地域に触れると同時に、それは地域で生き生きと活躍する人に触れる機会が増えてきているということです。それがどういう効果を及ぼすかということは、中期的、長期的にあらわれてくるものだと思いますが、既に確実に数値として見えているところでして、一つには新・職場体験やカタリ場を受けた子どもたちが、この益田市には魅力的な大人がいるということに対して肯定的な答えをする児童生徒の割合や、将来益田市で活躍したい、益田市で暮らしたいという児童生徒の割合が、大体20ポイントぐらい上がっているという結果があります。これは、アンケートというのは子どももどう答えたらいいかというのを忖度している部分があるかと思いますが、この20ポイント上がったという結果は、かなり大きなもので、無視できないものだ

思います。

それから、毎年成人式を行っておりますが、直近の成人式に出席した方々が、益田市のキャリア教育を始めた第1期生ということになりました。この成人式に来られた新成人を対象としてスマホや携帯を使ったアンケートでも、地域に対する愛着度がそれまでに比べて随分上がったという結果があります。こういった客観的なデータからも、ライフキャリア教育というのは地域への愛着や、それからもっと言えば地域に対する意欲に繋がっているというのは間違いないことだと思います。

この地域に対する愛着というのは、言ってみれば地域に対する責任感ということになりますし、それから地域を自分のものとして住み良くしていこうという当事者意識、あるいは何かに挑戦していこうという気持ちにも繋がってくるものだと思いますので、そういう意味で益田市のライフキャリア教育というのは既に大きな成果を上げているし、またこの成果は今後さらに広がっていくこと、他の分野に広がっていくことを十分期待できるものだと思います。

そうした現状認識のもとに立って、このライフキャリア教育というのは、主に非認知能力、やる気だとか意欲だとか、あるいは他者に対する思いやりとか、他者の感情に気づく力とか、そういった必ずしも学力試験では測れない非認知能力を伸ばすことに繋がってくるのがライフキャリア教育だと思いますが、一方でこのライフキャリア教育もしくは非認知能力だけ伸びてしまうと、これはバランスのとれた成長にならないと思います。極端な話をすれば、非認知能力はそうでないけども、学力、認知能力が低いような状態で成長すると、なかなか社会に出たときに苦労するし、また周囲の方も非常に扱いに困るようなことになってしまうおそれがあります。当然ながら、学力とか認知能力が高い子どもでも、非認知能力が極端に低いと、これはこれでなかなか社会で十分に活躍できることにならない。要するに、学力というものと非認知能力というものはバランスのよい形でどちらも伸びていくということが望ましいと思います。

もう一つ言えば、学力が伸びれば非認知能力も上がる、そういう下地にもなるわけですし、非認知能力が上がれば今度は学力も高めていこうという動機づけにも繋がってくるものでありますので、これは二律背反ではなくて、両方を追求すれば両方がよい効果を上げる相乗効果があるものだと思います。

その学力を育成するという観点から見たときに、先ほどの益田市の教育の認識の中で、例えば学びに向かう意欲が十分でないとか、メディアコントロールをする自己統制力が弱いといったとき、どういうふうにしてその学力を高めていける環境をつくるかというところで、これま

で益田市は保育園、幼稚園、こども園という就学前の段階、そして小学校、中学校、この辺は非常に連携がとれてきて、一本の流れができておりますが、これをさらに高校にまで延ばして、幼児期から中等教育の最後のところまで一つの流れにしていくということがこれから必要になってくるのではないかと思います。これは、学力育成という面でも非常に重要ではないかという問題意識が私の中にあります。

そうしたときに、保・幼・小もそうですし、小学校、中学校までは市町村の管轄ですし、高等学校以上は県の教育委員会の管轄になりますので、垣根があるわけですが、そこを超えて、中学校と高校の中等教育の課程、6年間を一貫した流れの中で提供していくということを益田市で実現できないかと思っております。

中高の一貫教育というのは、これまで益田市にありませんでしたし、高校が附属中学校をつくるというような形ではなくて、市が主導してつくっていくというのはなかなか全国に例のないことです。まずはこの総合教育会議の中で教育委員会の皆さんと意識を統一して、認識を共有させて、一体となって取り組んでいく必要があります。その上で、高等学校の教育を主管している県の教育委員会、私立であればその学校法人、それらと綿密に話をしていく必要があります。

今日はこの総合教育会議の中で意見を統一させていく、まず第一歩にしたいと思っております。今私が申し上げたことについてご批判、ご賛同、いろいろな方向性があると思いますが、忌憚のないお声を聞かせていただきたいと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

野村部長

ありがとうございます。

ただいま市長からいただきました益田市型の中高一貫教育に対する考えにつきまして、教育委員の皆さんからご意見をいただきたいと思います。自由に意見交換をしていきたいと思っておりますのでお願いいたします。

舟橋委員

益田市型中高一貫教育ということで、益田市型とありましたら、カタリ場や新・職場体験などを思い浮かびました。実際に、子どもたちが高校生ともいろいろな話ができて、また中学生が小学生に話しに行くとか、そういうカタリ場の中で子どもたちが一生懸命に話し合い、語っている中で、自分はこうしていきたいという願いを持つ姿を見たときに、これはすぐにできるような気がしました。中高一貫型教育であれば、教育目標や、全て一緒になってという形で考えていけないといけないでしょうが、この益田市型は今のカタリ場などを土台にしながら、できるところをお互いの力を出し合って、切磋琢磨していく、そういう教育であろうというふうに、市長のお話をお聞きしながら感じてきました。目標が、

未来を見詰められる、姿が見える、そういうあり方というのは、とても子どもたちにとってプラスになっていくであろうと感じております。

ただ、これは地域の方、それから保護者の方にどこまで理解されて協力を得ることができるか、その辺のところはまだ見えてきていない気がします。先ほど市長さんもおっしゃったように、結果が出ていて、数字が上がってきているというところのデータのことも、この中に盛り込んでいって、現状を確認できたうえで、今後の見通しがつくような表わし方をしていくと、より理解が深まるのではないかと思います。

中野委員

益田市型中高一貫のイメージが、まだ理解ができてないところですが、新設をするという考え方なのか、そうではなくて既存のものとの連携という意味合いなのかということをお伺いしたいと思います。心配しておりますのが、中高一貫というのは選ばれた生徒だけがそこに通うような状況が生まれるのではないかとということです。それから、学校選択の不公平感ということも生まれるのではないかなと思います。また、どういう形を今後進められるかというのが、イメージが十分できておりませんが、中学校から高等学校に上がるといったら受験がありますが、そういった受験等がどうなっていくのかということが心配なところです。まずはそのイメージとして、新設というイメージなのか、既存のところの連携ということなのか。既存であれば、ご承知のとおり、益田市には公立高校が2校と私立高校が2校あるわけが、そことも連携をどうしていくのか、いろいろ思うところがありますが、そのあたりお気持ちを聞かせたいと思います。

山本市長

益田市型中高一貫教育というのは、今回新しく打ち出したものですし、これは何かという定義はまだはっきりと示しておりません。今まで全国にあったようなものではなくて、益田市独自のものをつくっていききたい、ある程度私の中のイメージはありますが、それ以上のものを、例えば教育委員会の皆さんであったり、あるいは市民の方々だったり、いろいろな思いをいただいて、広い器の中にいろいろなものを盛り込めていきたいという思いもあって、あえて益田市型中高一貫教育というタイトルをつけたところです。

この中高一貫教育のイメージとしては、私としては新設よりは既存の高校のどこかと連携で結びついていくということをイメージしています。ですので、まずは市の思い、方向をしっかりと決めて、そして高校の設置者と具体的に協議をしていくというステップになってくるかと思います。ですから、中高一貫教育で何をを目指すのかというものを、今私がおぼろげながら自分の中で持っている考えに、さらに肉づけをして、市民の多くの方が求めるような中高一貫教育の理念だとか、それから中身、それ

をしっかりとつくって、その上で外部と協議していきたくと思います。

その上で、中野委員さんが一つの懸念として言われた、一部の児童生徒だけを対象にして、他の児童生徒は置き去りになるのではないかということですが、もちろん中高一貫教育というのは、まず全部の児童生徒がその対象になってくる、もちろん、その門戸は全部に開くわけですが、全員がそこに選ばれて、6年間一貫の教育になることはなかなか現実には難しいだろうと思います。したがって、そこは一部の児童生徒を特別な対象にするということは避けられないと思います。だから、そういったものが益田市内に実現したということは、市内の子どもたちの刺激になることは間違いないと思います。一つそれが学びに向かう意欲に、これも直接的から間接的までいろいろあるにしても、そういった刺激にもなるのではないかと思います。

そして、例えば中高一貫の中で、切磋琢磨して伸ばし合う子どもたちというのは、例えばライフキャリア教育をしっかりと積んできた子どもたちにいい影響を与えてくれる。また、ライフキャリア教育で育った子どもたちが、その中高一貫で学ぶことによって、さっき申しましたように、非認知能力の上に学力をプラスしていくという意味で、益田市のキャリア教育をさらに充実したものにしていく。そういった意味で、直接全部を対象にすることはできないにしても、その及ぼす効果を広げることは十分にできるのではないかと、それはやり方次第、考え方、理念次第ではないかと思っております。

中野委員
舟橋委員

ありがとうございました。

中高一貫教育という言葉が、既に法的に整理されております。そういったところで、どうしても高校と中学校が一緒になって、一つの、例えば場所ですとか、場所は別々でも教育目標など、そういうものの連携をとりながら決めていくというところが出てくるのだらうと思いますので、そういうイメージが離れませんでした。今こうして、市長さんのその考えは、今まで積み上げたものをいかに次へ繋げて、確立していくかというところにあるのだらうと思います。そうすると、この中高一貫教育という言葉がすでに先にできているから、非常に意識を変えるのが難しいと思います。

もっと益田市型というイメージが持てるような言葉があると良いのではないかと感じました。

おっしゃっているのは、既に整理されている中高一貫教育ではなくて、子どもたち同士が、例えばこの高校に自分に行ってみたいとか、そういう希望があれば、それぞれの中で関連づけて学習ができる場が、いつもあるのではなくて、随時そういう必要性を感じたときに年間何回とか、そういうような計画をしながらやっていく、そういったものになるので

はないかと思います。自分の得意分野のある学校でそういう経験ができれば、少し経験してみて違うと感じたら、また別の学校でとか、そういう変更ができるというぐらいの自由さのあるものができたらいいと思いますが、いかがでしょうか。

山本市長

大変すばらしいお話をいただいたと思います。

私が調べたところでは、中校一貫教育には3つの類型があるということでした。一つは、まさに中高の6年間を一つの学校でやっていくという中等教育学校という、6年間の学校をつくるということです。これが一つ目。それからもう一つは、高等学校に附属の中学校があるという、附属型というものです。世の中でいう私立の進学校、中高一貫という場合はほとんどこれです。それから、3つ目が連携型といって、学校は違いますが、中学校と高校、場合によっては設置者も違いますが、例えば教育内容、課程、それから児童生徒、教員、これが在学中に接点を持って連携してやっていくという連携型。ハードな中高一貫から、緩やかな中高一貫まで、大体この3つの類型があるそうです。

私としては、一番現実的なのは連携型で、それから場合によっては附属型も模索できるのではないかと考えているところです。もう一つ、益田市型中高一貫教育という場合には、舟橋委員がおっしゃったように、その選ばれた学校だけが中高一貫ではなくて、益田市内の中学校と高校が、連携型のように、いつでも行き来できる、そういう町にできないかという思いがあります。

一例を挙げると、今カタリ場を受けた高校生が、中学生に今度は自分がメンターとなって話すことができました。これは、まさに中学校と高校、別々の主体ですけども、中学校に高校生がやってきて、いろいろな語りかけをするということは、ある意味、益田市型の中高一貫教育がそこでできているとも言えるわけです。そういうふうに、益田市内全域の中学校と高校の交わりをもっともっと深くしていくということも、是非追求していきたいと思っています。

梅津委員

新しい時代に新しい益田市型の中高一貫というのはすばらしいと思います。ただ、わからないことが多くて、私立と公立とあるわけですが、小学生は受験をしてその6年間を選ぶということですか。

山本市長

さっき言いました附属型だと、基本中学校から高校への入試はないです。連携型だと、多分入試があるだろうと思います。私としては、できれば連携型であっても、入学試験が実質ないような形で、入った生徒が6年間を見通す中で学べるという体制をとっていければと思っています。つまり、入試があるとどうしてもそこで断絶が生じますので、なるべくその断絶が生じない形で、中高一貫の中学校に入れば、高校3年ま

で見通した安定した中で学習できる、そういう環境を提供することが望ましいのではないかと考えております。

村上委員

私もなかなかイメージが湧きにくい中で、既存の市内にある高校と、益田市にある中学校の生徒が、連携を深め、行き来を深めていく、一つはその方向があるということと、それから可能であれば附属の中学校のようなものができていくことも考えられるというお話がありました。実際に、益田市に複数の中学校がある中で、子どもたちはその中学校に籍を置いています、中高一貫の中で一つの教育の目標に向かって学んでいくわけですが、一つの中学校に子ども達を集めて教育を提供しようとしておられるのか、既存の中学校の生徒に、それぞれの一貫した教育のもとで教育を提供していこうとしておられるのかというところが分からないのですが、その辺はどのようなイメージでしょうか。

山本市長

あくまで、私の中の現在のイメージということで受けとめていただきたいと思います。もう一つは益田市型中高一貫教育のときに、全域を一貫にする流れでやっていくのと、もう一つは仕組みとして中高の6年間を見通すような形でいうところ、後のほうの中高の6年間を見通すという形をどうしていくかということですが、一番考えられる形は、小学校6年生の段階で何らかの関門があって、そしてその関門で適性があると認められた生徒さんが、その中学校に入り、そして、それが6年間、その中学校から高校に入れるというのをイメージしています。

それでは、どこでそれを行うのかということになると、これもまだ相手方と全く話をしていないことですので、私の勝手な考えですが、例えば高校で空き教室があるのであれば、それを中学1年生、2年生、3年生の3教室分お借りしてやっていくということもできるでしょうし、市内のいずれかの中学校の空き教室で1年、2年、3年、一クラス分だけ、その一貫の学校のために確保するということもあり得るかと思っています。

いずれにしても、その中高一貫の学校で学ぶ中学生は、一つの場所でいつも生活を一緒にしないといけないと思っています。例えば、具体的に言うと益田中学校と東中学校と高津中学校と、それぞれ一貫で学ぶ生徒いるという形ではなかなか効果が上がりづらいのではないかと思います。それは一つに集まって、日常生活、学校生活を送ることが最低限必要だと考えております。今のところ、そういうイメージです。

村上委員

中学校になったら、校区が関係なくなるということですか。

山本市長

そうですね。その課程に入る人は、全校区の中から選ばれて入るというイメージです。

村上委員

東京など都市では、小学校から試験があって中学校に入りますが、そ

れにも弊害はあるみたいです。特に益田ではそういうことをしていないので、受験で入るというところは厳しいと思います。どうしても小学校の間は、まだまだ体力的な面だとか、いろいろな面で育ちが十分に行かない子もいるのではないかと思います、その辺りの差が大きいと思いますので、今お聞きしながら、果たしてどうなんだろうかと不安になってきました。

山本市長 そこで、大きな課題は、小学校6年生の段階での選抜の仕方をどうやって行うのか、どういう手段によって行うのか、ここが非常に重要だと思います。単純に、例えば学力一本で行ったのでは、今のせっかく益田市が積み上げてきたキャリア教育というものの接続、そこからの発展にはならないのではないかと思います。本当に選抜の仕方は非常に大きな課題です。それが、ある意味、今目指そうとしている益田市型中高一貫教育の使命を制する大きな鍵になると思います。

村上委員 選抜の仕方もですが、高校3年を卒業したときにどのような18歳の人を育てていきたいのかというところを、そこを明確にして出していないと、教育の理念だとか、教育の内容など、提供していくものが変わっていくと思います。どんな18歳の人を益田市が迎えようとしているのか、どのようなところを目指していくのかという内容みたいなところをしっかりと話し合いたいと思いますが、そこに合う高校や内容だとかということもまた必要になってくるのではないかと思います。

山本市長 そこも大事なところだと思います。

私は、今までのキャリア教育についてもそうですが、将来は益田市で活躍する、それがマルで、益田市から出ていくことは、バツである、もしくは期待した成果から外れたものであるという考え方はどうかと思います。もちろん、その反対で、益田市にくすぶっているようではだめだ、どんどん都会に、海外に雄飛して、活躍しなければだめだというのは、それは違うと思っていますが、今村上委員さんが言われた、18歳の子ども、どういう生徒像、18歳像を描くか、それにどう当てはめていくかというのは、あまり狭いものにしてしまうと、また可能性を狭めてしまうので、どういう意欲を持ってとか、あるいはどういう将来像を描いて、どれだけの内面の強さを持って、これから社会で活躍できるのか、社会で強く生きていけるのか、そういう像をつくることは重要だと思っています。

私は、必ず益田市へ帰ってきて、益田市で将来益田市の子どもたちのためにロールモデルになる、それ一本に絞ったのでは、これは狭過ぎるのではないかと考えていまして、そこは本当に非常に重要なところだと思っています。

野村部長 ありがとうございます。

18歳のときの像を明確に私たちが持たなければいけないのではないかと、その一点では共通認識ができたのではないかと考えております。

今後さらに考え方に磨きをかけていかななくてはならないと考えております。今後も、折に触れてこういった機会を持たせていただこうと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

大畑推進監 全体を整理すると、今まで積み重ねたライフキャリア教育をしっかりとベースにしながら、非認知の力が高まった子どもたちに、認知の力をしっかりつけていきたいという市長の思いで、特に保・幼・小・中のところがしっかり連携できている益田市は、今度は中高の連携をしっかりとすることで、特に認知の力を伸ばすような取り組みをしたいということでした。市長のお考えでいうと、3つの類型でいくと、まず連携型のベースをしっかりとやっていきたいと。その先に、できるならば附属型も見据えて取り組んでいくことまでやっていきたいというのが市長のお考えであるということで、皆さんご理解いただいたと思います。

そして、次への課題としては、目指す18歳像をもう少しみんなで議論していく必要があるのではないかとこのところでは。

事務局のほうでは、市長から出ました連携型の具体像であったり、附属の可能性について、事務局としてもこれからしっかり検討してご提案させていただけるように準備をしていきたいと考えております。

長嶺課長 議論が今日のところで結論になるということではありません。

先ほど、大畑推進監でまとめていただいたところで、今日のところは一応の共通認識がとれたという形になろうかと思いますので、以上をもちまして第3回益田市総合教育会議を閉じさせていただきたいと思っております。ありがとうございました。

＝終了時間 16時34分＝